The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	後期近代における「共生」の社会学的考察 ： 再帰性の視点から
Author(s)	沈, 一擎
Citation	共生学ジャーナル. 2022, 6, p. 130-151
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

後期近代における「共生」の社会学的考察

―再帰性の視点から―

沈一擎*

A Sociological Consideration of " Kyōsei " in the Late Modernity

From the Perspective of Reflexivity

SHEN Yiqing

論文要旨

本稿では、社会学者 A.ギデンズの近代化理論と構造化理論を援用し、近代化の視点から後期近代における「共生」の様相を考察する。まずは、ギデンズの近代化論が描いた近代化の特徴を論拠としつつ、「共生」の言説は近代化の産物であることを論じる。次に、前近代社会の特徴を考察し、前近代において「共生」が成立できない理由について論じる。そして、近代化とともに徹底されていく再帰性に注目し、「共生」と再帰性の関係性を考察する。その上で、ギデンズの構造化理論に基き、後期近代における「共生」的諸実践に求められる能動的な行為者について考察する。

キーワード：共生、近代化、再帰性、存在論的不安、構造化理論、能動的な行為者

Abstract

This paper uses the modernization theory and structuration theory of sociologist A. Giddens to consider the aspect of "Kyōsei" in the late modern period from the viewpoint of modernization. The first part argues that the discourse of "Kyōsei" is a product of modernization, based on the characteristics of modernization drawn by Giddens' theory of modernization. The second part considers the characteristics of pre-modern society and discusses the reasons why "Kyōsei" cannot be established in pre-modern times. Then, paying attention to the reflexivity that becomes thorough with modernization, the third part considers the relationship between "Kyōsei" and reflexivity. Then, based on Giddens's structuration theory, the fourth part considers the active agents required for the practices of "Kyōsei" in the late modern period.

Keywords: Kyōsei, modernization, reflexivity, ontological insecurity, structuration theory, active agent

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 syqdisver@gmail.com

はじめに：近代化の視座から

「共生」は、近年において盛んになった社会的言説のひとつとして大いに注目されているものの、その定義に関しては、いまだに曖昧な部分が多く残っている。にもかかわらず、「共生」という言葉だけを付ければ「共生」の言説の一部として見なされるという言葉の濫用が生じてしまい、逆にその内実が不明瞭になっていく。「共生」という言葉が、一部の文脈において「良い関係性の維持」とほぼ同一視され、その中身について深く掘り下げられることが少ない。「共生」概念が「良い関係性の維持」という道徳的要請の範疇を越え、人の生き方、ひいては社会のあり方と関連する概念であることは明らかである。しかし、言葉のニュアンスをある程度把握したところで、その中身を体系的に表すことが困難である。

そもそも、「共生」概念が社会の言説空間に導入されたのは、グローバリゼーションの時代に入ってからである。グローバリゼーションの進行とともに、文化・ヒト・情報の越境的再配置が頻繁に行われ、ローカルな文脈の特権性の喪失と、世界全体の不確実性の増大が一気に顕在化した。一方、既成の文脈の喪失がもたらした未知性・意外性の経験は、現代に生きる人びとの自他関係、特に他者への承認に多大な影響を与えている。前近代社会における他者承認の多くは、ローカルな文脈に依拠したのに対して、近現代の人びとは「見知らぬ者」との遭遇を常に経験し、状況依存的に関係性を構築する。したがって、いかにして異質なものとの自他関係を確立・維持するかが、現代社会にとって重要な課題となる。

後期近代における他者承認の問題は、近現代における社会的諸関係の再編成に深くかかわっている。ギデンズ、ベック、ラッシュの三人の社会学者によって提起した「再帰的近代化」（Beck, Giddens and Lash 1994=1997）の概念が示したように、近代とは伝統の支配が瓦解し、あらゆる事象が不安定になっていく時代である。社会的構造のみならず、個人も常に自他関係、信念、行為などを再帰的にモニタリングする必要がある。グローバリゼーションの進行を介して、近代的諸制度の標準化・普遍化がありとあらゆる領域に行き渡る。ローカルな文脈が度外視され、我々の身体的諸経験と、今現在の時空間で起きるできごととの分離が絶えず拡大していく。目の前にある物事

の表象の下には、常に個人の見識と想像力を超えた膨大な複雑性が働いている。このような「時間と空間の分離」（Giddens 1990=1993:32-33）を背景にして、人びとが相互行為を交わす際に依拠する社会的文脈は、前近代社会のようにローカルな習慣や慣行のみによって完結されることはもはや不可能である。したがって、後期近代に生きる人びとの他者承認にも異変が生じ、前近代的な「我々/よそ者」的な関係性から、近現代的な「見知らぬ者」との関係性へ変化する。

「共生」概念には、「信念・属性・背景の異なる人びとの共存共栄」という関係性への志向がなかば自明的に含まれている。異質なものとの遭遇という近現代的な経験と「共生」概念の関連性について考えれば、「共生」に関する論説の発達は、近代化という現象と深く関係することが分かる。前近代社会では、異質なものが包摂されるどころか、むしろ差別と排除の対象であった。一方、近代以降に現れたローカルな文脈の喪失、異質なものとの近接などの現象が、「共生」の言説の発達に土壌を与えている。異質なものとの頻繁な遭遇は近代化の産物であり、同時に「共生」の言説の発達を支える近現代の現実でもある。したがって、「共生」の言説が人間の関係性、つまり社会的関係を捉えた以上、近代化にともなう再帰性から逃れることができない。よって、我々が「共生」について考察する際に、その近代的性格を念頭に置くべきであろう。

本稿では、社会学者 A.ギデンズの近代化理論と構造化理論を援用し、近代化の視点から後期近代における「共生」の様相を考察する。まずは第 1 節において、ギデンズの近代化論が描いた近代化の特徴を論拠としつつ、「共生」の言説は近代化の産物であることを論じる。次に第 2 節において、前近代社会の特徴を考察し、前近代において「共生」が成立できないことを論じる。そして第 3 節において、近代化とともに徹底されていく再帰性に注目し、「共生」と再帰性の関係性を考察する。最後に第 4 節において、ギデンズの構造化理論に基き、後期近代における「共生」の諸実践を促す能動的な行為者について考察する。

1. 近代化の産物としての「共生」

「共生」とは、近代以降に現れ、後期近代において発展してきた理念である。ウィトゲンシュタインによる「言語ゲーム（language game）」の概念が示しているように、「記号」、「語」、「文」と呼ばれるものの種類は、数限りなく存在している。その多様性は固定されていた状態で一度に与えられるものではなく、新たな言葉の誕生とともに古いものが廃れていく。そのため、「言葉を話すことがある活動の一部、あるいは生活の形の一部である。」（Wittgenstein 2009=2020:36-38）。つまり、言語は常に生活様式に応じて変化し、両者の間では反照的・再帰的な関係を呈している。よって、「共生」が社会的言説として成立し、実現すべくナラティブのひとつとして求められるようになったことも、近代に生きる人びとの内面の一部が言語という共通の「ゲームルール」を通して現れることと考えるべきであろう。「共生」理念の内実が何かに関しては、未だに定まっていない部分が存在するものの、「異質なものとの共存共栄」という相互関係への期待は確実に内包されている。ここで鍵になるのは、異質性の容認と包摂という特徴である。人間それぞれが持つ異質性への尊重を抜きにしては「共生」を語れない。そして、異質性に執着すること自体は、極めて近代的な事象である。

確かに、前近代社会の「地縁」からもコミュニティ内部での共存共栄を目指す関係性が見られるものの、ほとんどの場合は排他的・内部指向的なコミットメントに依存するため、「共生」に適う関係性とは言い難い。「共生」という概念の獲得は、近代化とともに進んだ生活の都市化、交通と通信の技術の発達に伴うグローバリゼーションの進行、日々高まる異質なものとの接触頻度などの、近代的諸様相が言説空間で反映された結果のひとつと言えよう。人間の異質性が日常生活のレベルで頻繁に発見・意識され、そして受け入れられることが、紛れもなく近現代の現象である。「共生」を近代化の産物として規定する理由は、その性格が近現代の文脈によって強く規定されたからである。よって、「共生」の内実について論じる場合、近代という背景に立脚することが重要だと考える。では、近代とはどのような時代であろうか。また、「共生」理念は近代のどのような特徴を帯びているのだろうか。これらの疑問に答えるために、イギリスの社会学者、アンソニー・ギデ

ンズ（Anthony Giddens）の近代化論が我々に貴重な示唆を与えた。

近代の姿は、単に前近代でばらばらに分かれていた各地のローカルな文脈をひとつにまとめるものではなく、その時間と空間の捉え方が、前近代のそれとはまったく異なっている。ギデンズは「モダニティ」、つまり近代性を、17 世紀以降のヨーロッパで出現し、後に全世界に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式として定義する（Giddens 1990=1993:13）。この定義は、後期近代との対比を強く意識し、リオタールによる「ポストモダニティ（postmodernity）[(1)]」の定義をも汲んでいる。自明なものとして共有されている価値観と価値体系（「大きな物語」）の崩壊にともない、世界に無数のナラティブが並列する状態に移行するというリオタールの論点から導きだされた後期近代は、認識論の基礎の不在や、集団間の不透明性の高まりなどの特徴を持っている。それに対してギデンズは、後期近代における方向感覚の欠如を認めつつも、単にそれを悲観的には捉えず、基礎付け志向との決別を近代化の一連の流れの必然な帰結として受け止めている。

ギデンズは、社会の近代化を推し進めている大きな力として「時間と空間の分離（separation in time and space）」、「脱埋め込み（disembedding）」、「制度的再帰性（institutional reflexivity）」の 3 つの要素を挙げる（Giddens 1990=1993:136）。これらの近代の特徴は、前近代と近代以降を峻別し、明らかな断絶を作りだした。さらに、後期近代において、これらの要素がさらに徹底化されることが想定されている[(2)]。ギデンズからすれば、近代の社会制度はいくつかの点において、いかなる伝統的秩序類型とも異なる性質を有し、前近代と近代の断絶、つまり「非連続性（discontinuities）」を示している（ibid.:15）。

近代社会では、交通機関、通信技術の発達とともに、社会的相互行為が重層的に展開され、社会関係もローカルな文脈――前近代社会の時間・空間的制限――から引き離され、より広い範囲で再編されるようになる。社会的複雑性が加速度的に増加し、それとともに社会的諸関係のシステムも変容し続けている。前近代社会が伝統の再生産を通して不変の状態でいられることに対して、近現代社会は変化そのものを日常的に受け入れざるを得ない。近代のこのような「動的」性格は、どこから由来するものなのか。ギデンズの近代化論が出した答えは、時間と空間が定式の脈絡から遊離することである。つまり、「時間と空間の分離」（Giddens 1990=1993:32-33）という近代

の動きと、それがもたらした「脱埋め込み」（ibid.:35）の現象である。

前近代社会においては、「空間」、「時間」は「場所」に固定[3]されていたため、ローカルな文脈が人びとの社会関係を規定していた。近代以降、社会的流動性が高まり、相互関係の対象が同じ文脈を共有しない他者まで拡大するようになる。人びとの社会生活が次第に対面的相互行為から解放され、本来なら空間的に隔たれた他者との関係の発達へと移行する。その結果、「時間」、「空間」が「場所」から切り離された。時間と空間の分離が進むにつれて、社会的諸関係がローカルな文脈から引き離され、無限に拡がる時間と空間の中で再構築されるようになる。それとともに、相互行為がローカルな時空間の文脈から解放され、対面的な関係性の拘束から遊離する状態となる。これがつまり、「脱埋め込み」するようになる。

近代化とともに諸個人がローカルな文脈から脱し、生活の基盤を抽象的システムに置きつつ、それぞれの時間と空間が広い範囲で流動するようになった。したがって、同質性に基づいた相互行為が著しく希薄化するようになる。人びとの間の関係性がいかなる前提にも拠らない「純粋な関係性（pure relationship）」（Giddens 1991＝2021:403）へと変貌していく。近代化のもとで、諸個人の「個人化」の度合が日々増していき、それに呼応してそれぞれが持つ異質性も強まっている。近現代社会において、人びとが本当の意味で「異質なもの」と出会い、対峙し、そして互いの関係性について真剣に考えるようになる。

「脱埋め込み」が進んだ結果、前近代社会の「伝統」を支えるローカルな文脈という定式的な準拠枠が効力を失った。さらに、グローバリゼーションによってもたらした社会の流動化、価値の多元化の中で、人びとが新たな承認問題と対峙し続けるようになっている。社会的「差別／包摂」の対象は階級、人種、国籍、宗教、ジェンダーにとどまらず、常に再分化を通して複雑性を増やしていく。諸個人の複数性が著しく高まり、それぞれの生き方、信念、価値、属性がぶつかり合う中で、「自分の生き方が正しいか」、「自分が持つ信念・価値が正しいか」などの実存的問題は、人びとの不安感を強く刺激するようになる。したがって、後期近代において、社会的諸関係が確実により多くの不確実性に囚われるようになり、諸個人の実存的な感覚がさらに揺さぶられ、「存在論的不安（ontological insecurity）[4]」に陥ってしまう。

実存的問題を抱えている諸個人が共に社会を営む場合、コミュニケーシ

ョンを阻害するもっとも大きな要因は他者が帯びる不確実性である。近代以降の社会において、伝統に依拠することが異質なものとの関係構築に寄与することはほぼない。自他関係の行方は人びとが置かれている状況に依存し、その場の判断に委ねなければならない。したがって、物事の結末が個人の選択に帰され、リスク化するようになる。特に、異質なもの同士の間の関係性においてこの兆候が顕著に現れるのである。さらに、後期近代が進んでいるうちに、社会全体の複雑性が際限なく高まっていくため、諸個人が抱く不安がさらに深刻化することは避けられない。

不安が猜疑と不信を生みだし、道徳的隔離、ひいては社会的断絶・対立を引き起こしてしまう。近代以降の自他関係には多くの不確実性が含まれ、常に衝突と対立のリスクを孕んでいる。グローバリゼーションの進行とともに、バラバラになった諸個人の社会的相互作用を秩序づけようとする社会的動きが多く現れている。「共生」の理念もまたその動きのひとつである。言い換えれば、「共生」の理念は、近代化という過程に置かれた諸個人の実存的問題と深く関わり、不確実性にともなう不安の克服を目指すテーマ群である。よって、我々が「共生」について論じるときに、近代化という背景だけではなく、不安に囚われる諸個人という主体をも念頭に置く必要がある。

2. 「共生」を拒絶する前近代社会

時空間が無限に拡大する近現代社会が示す動的性格とは異なり、前近代社会は限定された空間内の時間の統制、つまり既成の因習を繰り返す反復性を特徴とする。ギデンズによると、伝統(5)とは前近代社会の諸秩序をひとつにまとめる接着剤のようなもので、社会の凝集性を保つ必要なシステムである（Beck, Giddens and Lash 1994=1997:118）。伝統自体は、人びとに受け継がれていく一連の慣習、規則と儀礼の記憶であり、その権威性は過去準拠と反復的再生産によって維持されている。伝統は「なされる」ことだけではなく、「なすべき」ことをも具体的に指し示している（ibid.:124）。よって、伝統を骨子にする前近代社会では、特定の因習が再生産されていく正当性、つまり――ギデンズの言葉を借りれば――「完全無欠性」（ibid.:120）を常に

過去の歴史に求める必要がある。

もちろん、伝統の完全無欠性を維持するために、行為者の実践が欠かせない。伝統は、ただ単に人の意志が介在しない儀礼の機械的な反復ではなく、行為者によって解釈されながら、継続させられるシステムである。人びとは、過去のできごとや状態を記憶に依拠しながら、絶えず「伝統」を再生産する。このこと自体が、行為者の実践によるものにほかならない。世代を超えた経験の繰り返しがもたらす連続性は、伝統を「集合的記憶を組成する媒体」（ibid.:120）として確立させる。伝統の伝承は決して一個人に帰結できるものではなく、特定の集団の中での絶え間ない相互作用を通して成立するのである。

「伝統」という集合的記憶の媒体から情報を獲得・解釈し、そして再生産することに関しては、伝統の「守護者(6)」 が代表する行為者の実践なしでは継続することが不可能である。確かに、伝統は常に過去志向的であり、自身の完全無欠性を主張しながら現状を過去に押し戻そうとするが、しかしそれは単に、因習を元の状態で継続させることではなく、現在を過去に縛り付ける規範的諸要素の再確認と再解釈を含んだ絶え間ない「作業」（ibid.:120-121）でもある。言い換えれば、行為者が実践を通して過去の定式を現時点で再現するよう集合の記憶を調整（再確認と再解釈）することである。必然的に、伝統には既成の文脈に順応する特定の人間の間でしか共有できない「定式的真理（formulaic truth）」（ibid.:122）をともなうようになる。行為者にとって、伝統は歴史の蓄積だけではなく、実践の指針と帰結であり、改ざんの許されない規則の体系である。一方、行為者による儀礼への参加、「定式的真理」への承認が継続する限りにおいて、伝統の伝承が保証される。ある意味では、伝統と行為者の間でも再帰的な循環が存在し、伝統の「状況依存的」な一面（ibid.150）が垣間見られるものの、それはあくまで行為者によって執拗に行われた「定式的真理」に沿った伝統の再生産である。そのため、前近代は近代以降とは異なり、きわめて「静」的な性格を呈している。

ヴェーバーによれば、伝統的支配の正当性は、「古くより伝承されてきた秩序や首長権力の神聖（Weber 1976＝2012:52）」を基礎とする。伝統というシステムに内包された時空間自体の真理化を通して、「偉大な伝統」、「古来伝わる」、「最初から」などの言説を通じて、たとえ多少の捏造と想像が混じったとしても再生産の循環を成立させることができる。したがって、伝統は

再生産に支障を与えかねない要素を自身から隔離させなければならない。行為者の実践は伝統の再生産を支える要であるため、必然的に、行為者の素質（伝統への忠誠心）が厳しく問われるようになる。例えば、伝統の真理性に異議を唱えた行為者、伝統的な因習に馴染みのない行為者、掟を破った行為者などは、往々にして排除の対象とされてしまう。

以上の議論から分かるように、前近代社会において、「共生」に関する言説を成立させる土壌がほぼ存在しない。なぜなら、「共生」概念に自明的に含まれた「複数性」への要請、つまり他者の異質性への尊重は、根本において伝統の自己再生産と対立するからである。伝統は限定された時空間の中の限られた対象によって共有され、「守護者」の実践によって再生産されてく「聖」なるものであり、儀礼と「定式な真理」との結びつきを通して自己の保存と再生産をなによりも優先させるシステムである。そのメンバーシップを構成する行為者が伝統の真理性を疑いもなく信奉するほど、「守護者」がその務めを果すほど、伝統が長く存続し続ける。逆に、伝統は同じ文脈を共有しない「ストレンジャー」からの懐疑の目線には脆弱である。

もし伝統の真理性に異議を唱える機会がストレンジャーに開かれたら、伝統がたちまち慣習や迷信の類に堕とされる危険に晒されてしまう。均質的・閉鎖的な環境への依存故に伝統が排他的な性格を示し、常に「内部のもの」と「他者」を区別させていく（Beck, Giddens and Lash 1994=1997:150-151）。自身の真理性を限定されたメンバーシップ、あるいは「内部の者」の間で確立された神聖さへの侵犯は伝統にとって、許し難いことである。文脈を共有しない行為者を同化してシステム内部に取り入れること、あるいは「よそ者」と見なしてことごとく排除することしかできない。「ストレンジャー」を「ある社会集団の内部にあって、その主たる成員のものとは異なる性質を帯びている（と認知された）者」（徳田 2020:176）と考えれば、異質なものへの包摂を自明的に要請する「共生」の理念と、異質なものを異物として排除する「伝統」の間では、必ず深刻な矛盾が生じてしまう。

3. 近代以降の再帰性と「共生」

一方、近現代社会において「時間と空間の分離」および「脱埋め込み」が

もたらした時空間のエントロピーの絶え間ない拡大は、「伝統」を廃退させ、人びとが準ずる因習、信念を不安定な状態に晒している。さらに、グローバリゼーションの進行とともに、社会的相互関係の再編成が世界規模まで広がっていく。近代化がもたらしたのは、かつてないほど高度な不確実性である。前近代社会において、人びとが常に自分の行為を伝統的な因習と照らし合わせてその妥当性を確認していた。それに対して、近代以降ではローカルな文脈の瓦解とともに、行為の妥当性を規定する基準が失われつつある。ニーチェによる「神は死んだ」の宣言が示すように、近代以降の世界は基礎づけ主義的な世界観を棄却した。そのため、近代以降に生きる人びとには、状況に応じた能動的な判断と行動が常に求められている。社会も個人も「合わせ鏡」のような再帰的プロセスに捉われるようになる。共通の前提を失い、社会制度ですら自己再帰的にならざるをえない。

個人が行為を行う際、常に行為の根拠を問い直す必要があり、自他関係においても、自己を他者と照らし合わせ、それによって自身を再認識することを頻繁に行う必要がある。個人が自身の置かれた場面に合わせて行動しようとしても、状況の変化自体に追いつかなければならない。必然的に、近代に生きる人びとがあらゆる場面において、環境をモニタリングすることを通して、自省的に働かざるをえない。マクロとミクロのいずれの次元においても、そして両者の間でも常に反照的な関係性を呈している。ギデンズ、ベック、ラッシュなどの研究者たちは、「再帰性（reflexivity）」という概念を用いて、この反照的な性質を同定した（Beck, Giddens and Lash 1994=1997）。とくにギデンズは、近代の到来とともに、再帰性がシステムの再生産の基盤に入り込むことを指摘し、再帰性の徹底を近代と前近代を区別するもっとも重要な指標とする（Giddens 1990=1993:53-55）。

また、ラッシュは、社会構造を反映して影響を与える「制度的再帰性」と、行為者自身を反映して影響を与える「自己再帰性」を区別している（Beck, Giddens and Lash 1994=1997:214-215）。再帰性の観点に沿って近代以降と前近代の状況を比較してみれば分かるように、両者の相違点は明らかである。前近代において、「自己再帰性」が「制度的再帰性」から独立して伝統のみに向けられる（「制度的再帰性」が伝統という制度の特権性によって縛られる状態にある）ことに対して、近現代社会では、「自己再帰性」と「制度的再帰性」が互いに強く関わるようになる。前近代では再帰性の矢印は常に伝

統の再解釈と再生産に向けられ、既成の時空間文脈に囚われることに対して、近現代では再帰性がシステムの再生産そのものに組み込まれている。ギデンズは、近代の根底に存在する再帰性の徹底化について、以下のように述べる。

> いずれの文化においても、社会の実際の営みは、その営みのなかに絶えず供給されていく新たな発見によって日々手直しされていく。しかし、慣習の修正が、物質的世界への介入も含め、原則として人間生活のすべての側面に徹底して及んでいくようになるのは、近代という時代がはじめてである……モダニティに特徴的なのは、目新しいものをそれが目新しいという理由だけで取り込むことではなく、再帰性が―もちろん、省察それ自体にたいする省察も含め―見境もなく働くことである。
>
> （Giddens 1990=1993:56, 傍点筆者）

近現代において、制度的再帰性の徹底は、人びとの社会生活の不確実性を増大させ、いかなる価値、信念、確信も揺るがないものとしての根拠を失ったのである。「定式的真理」の不在は、近・現代と前近代の時空間の管理の仕方に大きな差異をもたらす。前近代では、共同体の時空間の再生産がもっとも重要視されたのに対して、近・現代では行為者自ら時空間のあり方の妥当性を問い直さなければならない。ものごとの真理性は、あらかじめ規定された文脈ではなく、懐疑心を徹底させた再帰性から見出すものとなる。グローバリゼーションの進行とともに、認識論の基礎の不安定さがさらに高まり、社会的実践のみならず、自他関係に関しても確信を失いつつある。一方、ギデンズからすると、真理主張の発達は決して再帰性によって妨げられることがない。むしろ再帰性の徹底を通して、人びとの自我が単に「各種の力が交錯する場以上のもの」になり、「再帰的自己アイデンティティの過程（processes of reflexive self-identity）」が可能になる（Giddens 1990=1993:187）。つまり、ものごとの真理性は、あらかじめ規定された文脈ではなく、懐疑心を徹底させた省察から見出すものとなる。

近代以降、自他関係における状況依存性は、異質なものとの関係性の決定権を個人の手に委ねる。前近代において、既成の文脈に応じて他者を受け入

れたり、排除したりすることがいとも簡単に、なかば自動的に行われていった。しかし近現代において、社会の流動化と個人化が人びとに「複数帰属」の特徴を与えたため、個人を単一の属性で判断することは往々にして、「ステレオタイプ」に陥ってしまう。アマルティア・セン（Amartya Sen）によるハンティントン批判(7)が示したように、現代の社会では、人は誰しもただひとつの集団に属し、同じ集団に属すれば似たような属性を帯びているという単純な仮定を正当化することは難しい。たとえひとつの集団の特徴が突出し、帰属集団カテゴリーの相対的な重要性が定まらないと主張しても、正当化すべきではない（Sen 2007=2011:46-47）。個人は、性別、人種、民族、信仰、国籍、職業、主義主張、性的指向など、様々な属性について、かつてよりも明確に自覚するようになっている。個人が所有するアイデンティティは、重層的かつ不安定なものであるため、その属性の位相を完全に把握することは困難である。センが指摘した通り、特定のアイデンティティの重要性は、社会的な背景に左右され、いかなるアイデンティティも永遠に重要であり続けることはない（ibid.:47）。よって、既成の枠組みに基づいた判断や、形式に留まったコミュニケーションは、誤った他者認識をもたらす危険性がある。

したがって、「共生」的な関係の維持と継続は、行為者の機敏さと我慢強さにかかっている。つまり、関係を確立するために他者とのコミュニケーションを繰り返していく中で、他者の素性を再帰的に確認し、それに応じて取るべき行動を修正していく必要がある。同時に、このような作業に耐えられる人格、つまり、ギデンズが指摘したような「再帰的自己アイデンティティ」を育てることが求められる。自身と世界や他者との関係を再帰的に営んでいく中で、身体を含めたアイデンティティが形成・維持されることを自覚することが、後期近代の生き方に繋がっていく要素である。「共生」の理念が人間と人間の関係性に焦点を定めている以上、自他関係における再帰性は避けて通れない。そもそも「共生」の視点からすれば、たとえ相手は自身と異なる属性を有し、多くの不確実性を帯びる「ストレンジャー」であっても、定式に縛られずに関係性の確立に努力すべきである。つまり、リスクを一旦「括弧入れ」した未来志向的な戦略を取る必要がある。「共生」の実践において、省察を通して関係性を再評価・調整しなければならない。

以上、ギデンズの「再帰的近代化」の理論枠組を踏まえて、「共生」と再

帰性の関係について考察した。近現代で浸透されていく再帰性は「共生」の言説に形成の契機を与えただけではなく、個人が「再帰的自己アイデンティティ」を確立することも、後期近代における「共生」的諸実践を持続させる重要な条件となる。たとえ既成の基準を失ったとしても、実践者が状況に応じて再帰的に働けるよう内面を補強することができれば、再帰的プロセスに基づいた確固たる関係性を確立させることも不可能ではない。したがって、後期近代における「共生」の諸展開は、実践者の再帰性への適応力にかかっているとも言えよう。

4. 「共生」を促す能動的な行為者

近代化の進行は、時空間のエントロピーの絶え間ない増大であり、過去の状態を常に相対化していく動的過程である。このダイナミックな変化を直観的に体現するのが、ほかならぬ「再帰性」である。近代の社会で指数関数的に膨らみ上がっていく複雑性と不確実性は、あらゆる領域において再帰的な営為を求めている。社会制度でさえも、現時点以前の経緯を振り返りながら自己修正していくという再帰的プロセスを辿る中で、個人も当たり前のように、様々な場面において状況に応じた自己決定に迫られている。既成の文脈を失った個人にとって、実践には省察と再修正の循環が付き物となる。

ギデンズの近代化論は、構造の変動が個人レベルの事象を規定し、個人レベルの事象がかえって構造を規定していくという、ミクロとマクロの相互規定の循環に注目する傾向が強い。彼は著作『社会の構成（*The Constitution of Society*）』において、社会科学における「マクロ／ミクロ」の枠組を以下のように批判する。

> （前略）相互行為のほぼすべての位相は時間に沈殿する。そのため、相互行為のそうした位相の意味を理解するためには、そのルーディン性や反復性を考察しなければならない。さらに、ミクロとマクロの空間的分化という言い方も、それを慎重に考察してみれば分かるように、不適切な表現である。というのも、出会いの形成や再形成が生起する直接的なコンテクストよりも常に広範となるからである。

（Giddens 1984=2015:177, 傍点筆者）

このように、ギデンズの視点は空間だけではなく、時間の流れに含まれた連続性と反復性をも捉えている。「時間と空間の分離→脱埋め込み→再帰性の徹底」という近代化の図式からも、社会の「動」的性格への強い意識がうかがえる。ギデンズが考えた社会は、構造（マクロ）による一方的な規制から成り立つものではなく、個人の行為（ミクロ）を含めた再帰的プロセスの中で現れるものである。そのため、彼が予見した後期近代の姿は、ポストモダニティ論者が考えるような消極的なものではない。近現代に生きる人びとは不確実性による方向感覚の欠如から逃れないものの、再帰性に適応していく中で「再帰的自己アイデンティティ」を確立させ、状況に依拠して新たな秩序を再帰的に構築していくことが可能である。つまり、後期近代とは無秩序な「アノミー」状態によって支配された世界ではなく、ただ、前近代のように過去志向的に構築されることなく、未来に向けて開かれたのである。近代化の根底にある再帰性の徹底を考えれば、「共生」の理念自体は再帰性によって条件付けられるだけではなく、後期近代における「共生」の発達もまた、再帰性への実践者の適応によって実現しうる。前節において、再帰性に適応できる実践者の必要性について触れたが、それはどのような存在であるかについて補足したい。

ギデンズの近代化論、または「再帰性」に関する議論を理解する上で重要なのは、近代と前近代における時間と空間の存在様式の違いを理解することである。近代化を「動」的過程として捉えるという視点は、ギデンズの「構造化理論（structuration theory）」（ibid.:9）の考え方を反映している。社会学理論において、個人と社会、または行為と構造の二元論の構図が存在し、社会システムを個人の行為のような社会的諸部分から説明するか、それとも社会の構造から説明するかに関しては、長らく議論されてきた。社会的諸部分の機能を重視する機能主義と、社会の構造を重視する構造主義の二項対立を克服するために、ギデンズが社会を「構造化」という動的過程の中で説明することを試みた。従来の構造主義と機能主義のいずれにおいても、社会的全体が個々の部分（社会の構成要素である行為者や人間主体）に対して優位に立ち、構造は行為よりも上位に置かれ、構造が持つ拘束性が強調されている（ibid.: 27-28）。したがって、社会変動は全体社会システムのレベルで説

明され、行為者は単に機能的要件を満たす存在に成り下がってしまう。

それに対してギデンズは、行為者による主体的行為（human agency）を構造（structure）に隷属するものとして捉えず、構造と行為の間で相互依存関係が存在することを主張する。ギデンズからすれば、行為者が有する「知識能力（knowledgeability）」に存在する「固有の反省的な形式」、あるいは再帰性こそ、社会的慣習が再生産される前提条件である。そして同時に、社会的慣習の存在もまた行為者の再帰性を成立させる（ibid.:28-29）。構造とは社会的システム(8)の再生産において「再帰的に組織化された規則と資源の集合」であり、行為者によって「記憶の痕跡として具現化され調整されないかぎり、時間と空間の外部にある」。そのため、構造は「主体の不在」の特徴を持っている。構造の特性が時間・空間を越えて再生産されていくことは、人間行為者による「（構造に）状況づけられた活動」なしでは成り立てない（ibid.:p.52）。一方、構造の諸特性は行為者の行為の方向を決める条件でもある。行為と構造は、互いの前提でありながら、互いの結果でもあり、一種の循環を呈している。

行為者の行為と諸構造の構成は互いから独立した現象ではなく、二元論のような対立し合う関係性よりもむしろ、絡み合った二重性を呈している。このように、構造と行為のいずれも「構造が行為を規定する→状況づけられた行為による構造の変革→構造による行為への新たな状況づけ……」という循環を辿ることによって成立する。人間の行為をその知的経験から隔離することが不可能であり、行為者が持つ知識がやがて再構造化を通じて構造の血肉となる。その結果、行為と構造はあたかもコインの裏表のように、相互依存かつ相互規定的な関係になり、社会的プロセスをともに進めている。ギデンズは、行為と構造のこのような関係性を「構造の二重性（duality of structure）」と名付け、「構造の二重性は常に、時間−空間を越えて社会的再生産が継続していく主要な基盤である（ibid.:54）」と指摘する。

特に注目すべきなのは、行為者が担う役割である。行為者は日常の活動において、システムに基づいたルーティン（定式化された慣習、規則など）にしたがって様々な状況に対応しようとする。だが、ルーティンに含まれた知識は、あくまで過去志向的かつ言説的なものである。既存のルーティンでは解決できない状況が生じた場合、局面を打開する主体性を発揮するのが、ほかならぬ人間の行為者である。行為者には「知識能力」とい

う固有の特徴を有するため、日々の行為の生産と再生産において、自分または他者が置かれている環境を深く理解し、最善と思われる行動を取ろうとする（ibid.: p. 49; 419）。したがって、行為者の行動を規定する構造は、同時に暗黙の裡に有能な行為者の知見と実践によって再構築されることとなる。行為者は、単に構造をひたすら機械的に再生産していく存在ではなく、状況に応じた行動の反省的モニタリングを通して持続的に関わる能動的な存在である。

構造化理論の枠組において、構造は行為者にとって常に拘束的かつ能力付与的であり、構造が行為者の社会的実践によって遂行されて初めて、システムの再生産が可能となる。しかし、システムの構造特性を社会的実践の「成果」と呼ぶことは妥当ではない。このように考えてしまうと、行為者が力を合わせて意図的に社会システムの構造特性を創造することを想定せざるをえないが、人間の「知識能力」に限界があるため、未来の可能性と不確実性のすべてを把握することは不可能である。実際、我々が自らの活動の結果から生み出した諸帰結に関しては、ほとんど無知に等しい。行為者が反省的モニタリングを駆使することは可能であるものの、意図せざる結果を生み出すことが避けられない（Giddens 1984=2015:54）。

社会システムの構造的特性は行為者の諸実践の媒体でありながら、行為者の再帰的営為の結果でもある。ギデンズが描いた社会像においては、行為と構造が互いを規定しあい、行為主体と構造両方に変革の契機がもたらされるのである。行為者の有能さを肯定し、「能動的な行為者」という人間像を持つことが、この理論の大きな特徴である。行為者は単に、構造によって規定・抑圧される存在ではなく、その実践は構造に変革をもたらす要因にもなりうる。確かに、人間の「知識能力」に限界があり、再帰性を全力で駆使したところで、未来の不確実性を解消することなど不可能である。しかし、行為と構造との間に存在する相互依存関係に関する考察は、有能な行為者に秘められた可能性を強く示唆している。

「構造の二重性」に基づいて考えれば、「共生」の構築にあたって、能動的な行為者の存在が重要であることが分かる。社会学において、複数の行為者の間で相互行為が行われる場合に生じる関係性は「社会的なもの」として捉えられる。一方、「共生」の理念には、「異質なものの共存共栄」という関係性への志向が含まれているため、一個人で完結できる状態ではなく、諸個

人の間の関係性を捉えていることが自明的である。したがって、「共生」という状態は根本において、一種の「社会的なもの」である。また、「共生社会」の構築には、「旧来の社会的構造を変革させ、異質なもの同士の共存共栄を可能にする」という意味合いが含まれるため、その根底にあるのは旧来の社会的ルーティンへの固執の否定である。

後期近代が進むほど、社会の流動化と複雑化に伴い、「共生社会」の構築がますます重要となる。したがって、再帰的に反省・行動することに適応した「再帰的自己アイデンティティ」の確立は「共生」の展開に寄与する重要な要素と考えられる。構造化理論において、人間の「知識能力」に含まれた自己再帰性が構造を変革させる契機と見なされる。能動的な行為者が自己再帰的な省察を通して、より正確に自身が置かれた社会の状態を把握することが可能である。したがって、状況に応じて行為のルーティン（システムの一部）を変革させることは、不確実性への対応力の高まりに繋がる。異質なものの存在が日常になりつつある中で、能動的な行為者が示している不確実性への強い適応力と包容力がますます重要になるだろう。

「共生」の理念が求められる状況において、異質なもの同士の間では高い不確実性が存在し、共有された基礎付けがほぼ存在しないことが想定される。相手を警戒しながら素性を探り、反応をうかがうことには多くのコスト（時間、労力）がかかる。そのため、相互関係の形成が情報蓄積の段階で挫折してしまうことが多々ある。特に、見た目から異質さ（人種、民族などの属性）を読み取れる場合、「怖い」や「面倒くさい」などの気持ちでコミュニケーションすら拒むことも珍しくない。この場合、自他の状態を機敏に把握し、再帰的な省察を通してリスクを想定し、敢えて他者と向き合う能動性がないと、関係性の構築に踏み切ることはできない。異質なもの同士の間で存在する不確実性という障壁は、行為者による再帰的営為を通してしか取り除けないのである。

能動的な行為者なら、旧来の行為ルーティンに縛られず、異質なものを自分と対等な人間、または自律したものとして敬意を払うことが可能である。さらに、相手に対する支配、搾取の念を自制し、相手個人の素性のみに焦点を当てて自発的なコミットメントを行うことによって、関係性の構築と継続を着地させることが可能である。これは、不確実性が存在するのにもかかわらず未来志向的な戦略を取ることを意味している。したがって、行為者が

自らリスクを背負うまでして行為のルーティンを変革させることが可能である。マクロのレベルにおいて、既成のルーティンを変革するよう能動的に行動する行為者が多いほど、社会全体における価値の多元化、ひいては不確実性に対する順応性の高まりが期待できる。

おわりに

以上、ギデンズの近代化理論と構造化理論を援用し、後期近代における「共生」の様相について考察を行った。これまでの 4 節の検討を進める中で感じられたことは、「共生」概念と近代化、または再帰性との強い関連性である。「共生」の言葉は、様々な分野で異なるニュアンスで用いられているものの、もっとも広く扱われたのは、やはり「人間の間の共生」である。そして、「共生」の言説が確立された背景には、近代化とともに高まっている「他者の不確実性」が存在する。グローバリゼーションの進行とともに「脱埋め込み」が進む中で、我々の日常生活は常に異質なもので溢れるようになる。近代以降に起きた基礎付け主義の退廃とともに、他者と良い関係性を保ちながら共存するという「当り前さ」を失っている。よって、「共生」の理念は、後期近代に向かって進む現代社会にとっての死活問題になりつつある。そして、諸個人の異質さを一旦「括弧入れ」にして再び社会的連帯を発見するために、「共生」的実践の主体となる行為者には、既成なルーティンにすがるパーソナリティの棄却、または強靭な「再帰的自己アイデンティティ」の確立が必要とされるようになる。

現代人が対峙しようとする後期近代は、近代化の延長線上にあり、再帰性がさらに徹底されていく状態である。ギデンズが構造化理論で論じるように、人間の「知識能力」には常に自己再帰性が含まれている。しかし、前近代と比べて、後期近代で行為者が求められる再帰性への「熟練さ」がまったく異なる。後期近代は再帰性を徹底される時代と言えば、前近代は再帰性が停滞する時代とも言えよう。後期近代で拡大しつつある時空間の中で、行為者が対面する諸状況・諸場面は常に不確実性に満ちているため、前近代社会で見られた伝統の「完全無欠性」のような、過去を持って現在と未来を規定しようとする過去志向的な方法論はもはや望ましくない。行為者にとって

伝統の反復性にすがることよりも、むしろ目の前の状況が帯びる複雑性を随時の判断と省察で対応することが重要となる。

ギデンズの諸論を概観すると、彼が構造化理論で提示した有能な行為者像は、後の「再帰的自己アイデンティティ」によって引き継がれたとも思われる。筆者が特に注目したいのは、能動的な行為者が後期近代における「共生」の理念または諸実践の展開において担う役割である。前近代と近代以降の間でみられる再帰性のリズムの差を踏まえて考えれば分かるように、近代化のもとで生まれた「共生」の理念と諸実践は、むしろ率先して自己再帰的な要素を体現しなければならない。もちろん、この再帰性は伝統の再生産でみられる「過去志向」的なものではない。「共生」の理念は近代化の産物であり、「共生」の実践者にもまた、反省と修正の繰り返しといった自己再帰性の熟達、または「未来志向」的な戦略を取ることが求められている。「共生」のテーマについて検討する際に往々にして引き合いに出される異質なものとの関係性の問題も必然的に、再帰的に扱われなければならない。

異質なものに対して「過去志向」的な戦略を取った場合、行為者の選択肢の幅が著しく狭められることが予想される。つまり、「異質なもの」の存在を排除・隔離するか、同化するかのいずれを選択することによって、本来の同質的環境に回帰することとなる。一方、制度的再帰性に適応性を持ち、自己再帰性を「未来志向」的に活用できる行為者にとって、異質なものへの対応においてより多様性に富む選択肢が与えられるのであろう。なぜなら、このような能動的な行為者にとって、未来に存在する数多ある可能性を視野に据えながら、再帰的モニタリングを通して自他が置かれている状況について繰り返し省察・反省することが可能であるからである。したがって、自他関係における「確実な答え」の代わりに、状況に応じた「最適な答え」を追い求め続けるプロセスの形成と定着に寄与することも考えられる。後期近代において「共生」的関係性を確立するために、既成の枠組みによって縛られない実践者による再帰的働きが必要である。制度的再帰性が徹底されていく中で、自己再帰性を巧みに駆使する有能な行為者には既存の構造を変革させ、自他関係に革新をもたらす可能性を秘めている。ギデンズが近代化の過程における有行為者に寄せた期待もまた、「共生」の実践者にもとめられるもっとも重要な素質ではなかろうか。

注

(1) ポストモダニティとは、モダニティ、つまり近代性の後に現れる社会的・経済的・文化的な諸状態である。ポストモダニティについての定義は数多く存在しているものの、代表的なのはリオタールによるものである。リオタールが著作『ポストモダンの条件（*La condition postmoderne*）』（1979）で提示した後期近代の様相は、「大きな物語（grand narratives）」の終焉がもたらした一連の帰結である。「大きな物語」とは、権威的・宗教的論理からの脱却や、個人が知的活動の主体になることなどの、人間理性に全般の信頼を寄せた知のあり方を正当化する、人びとに共有された価値観や信念の体系である。リオタールの論説の中心は、この近代の知の体系の自明性の崩壊と知の特権性の喪失・相対化にある。「大きな物語」の終焉には、ポストモダン社会への移行に繋がり、共有範囲が縮小した異なる価値体系を有する複数の小集団が並列する状態が現われる（浅野 2012; 馬場 2013）。

(2) 前近代において、地域・居場所ごとに時間が異なる不定時法が採用され、「時間」を「場所」と結びづいて社会生活を営むことがほとんどである。機械時計が普及する以前、時間の測定には定式がなかったため、常に「空間（および場所）」という標識に頼る必要があった。また、人びとの社会生活の空間的特性は、体感できる空間で起きるできごと、つまり特定の場所に限定された活動によって支配されたため、個人にとって「空間（space）」と「場所（place）」がおおむね重なる状態であった。

(3) 「前近代」、「近代」、「後期近代」といった区分は、厳密に言うと年表的に区切られたものではなく、近代的諸特徴が浸透する程度を表す際に用いられた言葉と考えた方が正しい。例えば、同じ時点において、都市のようなより「近代」や「後期近代」に近い領域と、農村のような「前近代」に近い領域が並存することが普通である。後期近代はあくまで、近代の延長線上にあり、近代の諸特徴がさらに徹底された状態である。

(4) 「存在論的不安」とは「存在論的安心」（ontological isecurity）を失った状態を指す言葉である。ギデンズは、「存在論的安心」を「自己と社会的アイデンティティの存在に関わる基礎的変数、あるいは自然的世界ならびに社会的世界が現れのままであることへの確信あるいは信頼」（Giddens 1984＝2015:418）、もしくは「個人の直接の知覚環境にないものをも含む出来事に対する連続性や秩序の感覚」（Giddens 1991＝2021:404）と定義している。

(5) 「伝統」の概念に関しては、以下二種類の違った意味で使われることが多い。ひとつはヴェーバーが論じた「伝統的行為」のような、長く続いてきた定型的営みを指す。もうひとつは、ガダマーの解釈学のように、現在の意味の地平の一部として想起される「過去」を指す（佐藤 2012:920）。ギデンズが用いた「伝統」の概念は、上述両者の流れをともに汲んでいる。

(6) ギデンズによれば、伝統の守護者とは長老、治癒師、呪術師、宗教上の政務執行者などのような、伝統の中で重要な行為を果たし、伝統の有する「原因力」――伝統的文脈に基づく合理化――の作用主体である。その能力は「遂行能力」にとどまらず、伝統的秩序をつくる「秘伝の配り手」として、伝統を知り尽く

す専門家として、伝統の有する「原因力」と深くかかわっている（Beck, Giddens and Lash 1994=1997:122-123）。

(7) アメリカ国際学者ハンティントンは、著作『文明の衝突（*The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*）』（1996）において、冷戦後の世界秩序について、文明を単位とする衝突が活発することと、「文明間の対話」の必要性を強調する。それに対して、センは「想像から生まれた単一基準のアイデンティティが利用される顕著な例」と批判し、「文明の衝突」という命題自体は還元主義的であり、文明のカテゴリー内部の多様性を見逃していることを指摘する（Sen 2007=2011:27-29）。

(8) ギデンズは構造化理論において、「システム」と「構造」を明確に区別している。ギデンズによれば、「構造」とは「規則と資源、あるいは変換関係の集合であり、社会的システムの特性として組織される」ものである。一方、「システム」とは、「行為者あるいは集合体間の再生産された関係で、一定の社会的慣習として組織化される」ものである。「システム」とは慣習としてルーティン化された社会的実践であり、時間と空間内に存在するものである。「構造」は時間と空間の外側に存在し、行為者の行為という媒介を通して時間と空間を超えて再生産されていく。一方、「システム」の再生産は、行為者の社会的実践によって遂行される（Giddens 1984=2015:52; 藤嶋 2009）。

参照文献

Beck, U., Giddens, A. &Lash, S. 1994. *Reflexive modernization*. Polity Press.＝1997、『再帰的近代化』松尾 精文・小幡 正敏・叶堂 隆三訳、而立書房

Beck, U., 1992. *Risk Society: Towards a New Modernity* (Vol. 17). SAGE.＝1998、『危険社会』東 廉・伊藤 美登里訳、法政大学出版局

Bauman, Z. 2000. *Liquid Modernity*. Cambridge: Polity.＝2001、『リキッド・モダニティ――液状化する社会』森田 典正訳、大月書店

――――. 2006. *Liquid Fear*. Cambridge: Polity, 18.＝2012、『液状不安』澤井敦訳、青弓社

Bauman, Z., May, T. 2014. Thinking Sociologically (2nd edition). John Wiley & Sons.＝2016『社会学の考え方（第二版）』奥井 智之訳、ちくま学芸文庫

馬場 智理. 2013. ポストモダンのゆくえ:『ポストモダンの条件』におけるパラロジー論をめぐって. 研究紀要, 19, 91-104.

徳 田剛. 2020.『よそ者/ストレンジャーの社会学』、晃洋書房

藤嶋 康隆. 2009. 構造化理論の再検討. ソシオロジ, 54(1), 53-68.

Giddens, A. 1984. Constitution of society, Polity Press＝2015、『社会の構成』門田 健一訳、勁草書房

――――― 1990. The Consequences of Modernity, Polity Press.＝1993『近代とはいかなる時代か? ――モダニティの帰結』松尾 精文・小幡 正敏訳、而立書房

――――― 1991.Modernity and self-identity: Self and society in the late modern age. Stanford university press.＝2021『モダニティよ自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』秋吉 美都・安藤太郎・筒井 淳也訳、ちくま学芸文庫

Luhmann,N.1968.Vertrauen:ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität, Stuttgart, F.Enke.＝1990、『信頼――社会的な複雑性の縮減メカニズム』大庭健・村 俊之訳、勁草書房

片山 義博.2007.『差異と承認――共生理念の構築を目指して』創風社

Weber,M.1976.Wirtschaft und Gesellschaft（5. Aufl.）, Studienausgabe, Tübingen: J.C.B.Mohr.＝2012、『権力と支配』濱嶋朗訳、講談社

Wittgenstein,L.2009.Philosophical Investigations. Revised 4th Edition by P.M.S.Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell＝2020、『哲学探求』鬼界彰 夫訳、講談社

佐藤 俊樹.2012.「信頼」大澤・吉見・鷲田編集委員・見田編集顧問［2012：920］『現代社会学事典』弘文堂

Sen,A. 2007.*Identity and violence: The illusion of destiny*, Penguin Books India.＝2011、『アイデンティティと暴力: 運命は幻想である』大門毅監・東郷えりか訳、勁草書房

萩原 優騎.2008.アンソニー・ギデンズの 「再帰性」 概念について. 国際基督教大学学報. II-B, 社会科学ジャーナル,(66),51-69.